

新刊紹介

一〇六(四六)

ルマニーの焦燥や自負が感じられるようであった。今後のイスラーム思想研究も本書のように、思想の内容とそれを生み出す背景となつた社会状況を絡めて行わると、歴史学徒も手に取り易いものとなる。その意味で本書は、その模範例を示しているといえる。

(橋爪烈)

馬場恵二・三宅立・吉田正彦編
『ヨーロッパ生と死の図像学』
(明治大学人文科学研究所叢書)

東洋書林 二〇〇四・三刊
A5 六四七頁 九五〇〇円

本書は、明治大学の研究者を中心に一九九七年結成された「図像学研究会」の、六年にわたる研究討議の成果である。多数の図版を伴う一般向けの体裁を採用しているとはいって、その専門性は高い。

六百頁強の紙幅には、八本の論考が収録されている。巻頭を飾る馬場恵二「キプロス島アシーヌ聖母教会堂と『キリスト再臨図』」は、十二世紀に建立されたキプロ

ス島アシーヌ聖母教会堂の壁面を覆う「キリスト再臨図」の図像プログラムを、著者自身によって書き起こされた碑文情報や同時代文献史料とつき合わせながら、解読する。尾崎和彦「北欧神話の図像表現モティーフ」は、北欧神話のコスモロジーが表現されていることで著名な十世紀の「ゴスフォース十字架」(イングランド・カンブリア州)の図像を、神話学的なアプローチにより検討する。富田知佐子「ロシアにおける聖母崇拜について『守護』と『癒し』の主題を中心には、今なおロシア社会の中に息づいている聖母子像のイコンに対する崇拜形態の変遷を、中世以降の社会変動の中に位置づける。山田恒人「道化師たちの変容」は、おかしみとともに悲しみをも催させる道化が近代演劇史の中でどのようなイメージ変容を遂げてきたのかを整理する。薩摩雅登「ティルマン・リーメンシュナイダーの『聖血祭壇』」は、中世末期ビュルツブルクの彫刻家リーメンシュナイダーによる、ローテンブルクの聖ヤコブ

ス島アシーヌ聖母教会堂と『キリスト再臨図』は、十二世紀に建立されたキプロス島アシーヌ聖母教会堂の壁面を覆う「キリスト再臨図」の図像プログラムを、著者自身によって書き起こされた碑文情報や同時代文献史料とつき合わせながら、解読する。尾崎和彦「北欧神話の図像表現モティーフ」は、北欧神話のコスモロジーが表現されていることで著名な十世紀の「ゴスフォース十字架」(イングランド・カンブリア州)の図像を、神話学的なアプローチにより検討する。富田知佐子「ロシアにおける聖母崇拜について『守護』と『癒し』の主題を中心には、今なおロシア社会の中に息づいている聖母子像のイコンに対する崇拜形態の変遷を、中世以降の社会変動の中に位置づける。山田恒人「道化師たちの変容」は、おかしみとともに悲しみをも催させる道化が近代演劇史の中でどのようなイメージ変容を遂げてきたのかを整理する。薩摩雅登「ティルマン・リーメンシュナイダーの『聖血祭壇』」は、中世末期ビュルツブルクの彫刻家リーメンシュナイダーによる、ローテンブルクの聖ヤコブ

宗教改革へと向かう同時代ドイツ社会の中に置きなおして分析する。吉田正彦「リヒモーディス・フォン・アドウフト婦人の生死ある伝説の誕生」は、「仮死者」という民俗学的モチーフのひとつに分類される『ゴスフォースの十字架』に見る生と死のモティーフ」は、北欧神話のコスモロジーが表現されていることで著名な十世紀の「ゴスフォース十字架」(イングランド・カンブリア州)の図像を、神話学的なアプローチにより検討する。富田知佐子「ロシアにおける聖母崇拜について『守護』と『癒し』の主題を中心には、今なおロシア社会の中に息づいている聖母子像のイコンに対する崇拜形態の変遷を、中世以降の社会変動の中に位置づける。山田恒人「道化師たちの変容」は、おかしみとともに悲しみをも催させる道化が近代演劇史の中でどのようなイメージ変容を遂げてきたのかを整理する。薩摩雅登「ティルマン・リーメンシュナイダーの『聖血祭壇』」は、中世末期ビュルツブルクの彫刻家リーメンシュナイダーによる、ローテンブルクの聖ヤコブ

直接の時間幅は中世前期から現代まで、空間枠はラテン・キリスト教世界を母体と

した狭義のヨーロッパ本土だけではなく、その影響圏である中米や、正教圏であるビザンティン世界ならびにロシアも含む。執筆者の専門は多彩であり、きわめて狭い範囲の歴史を専攻する評者が全論考を個別に評することは難しい。それゆえ以下では、本書を通読して感じたことを二点指摘するにとどめたい（なお、評者の知る限り、本書に対する書評は、神品芳夫『駿台史学』一二四（一〇〇五）一二七—一二二頁、佐藤正紀『文芸研究』九六（一〇〇五）一五九—七六頁、小佐野重利『DALS ニューズレター』六（一〇〇五）五六六頁、があるので、それらも参照されたい）。

ひとつは、「はじめに」で編者の一人である馬場も強調していることであるが、収録された論考の多くで諸文明や諸文化の重層性が再確認されることである。例えば馬場論文からは中世ビザンティン図像世界に残る古典期以前のギリシア世界の観念が、尾崎論文からはキリスト教のシンボルとも言べき十字架の中に残るスカンディナ

ヴァイアの世界認識が、吉田論文からは、支配的であったキリスト教思想とは必ずしも相容れない民俗的慣行が、野田・川田論文

からは、一見カトリック世界に接合したように見えるメキシコにのこる先住民的世界觀が、三宅論文からは、世俗化の進んだ現代世界では後景に追いやられていたはずの宗教思想、とりわけ終末論的思想が指摘されている。このような、一旦は消え去っていたかのように思われる過去の文化層が思われぬところで噴きあがる歴史社会の文化的重層性は、わが国においても以前より指摘されてきたが、それが具体的な史資料を通じて検討されることは今もって貴重である。とりわけ、古代史家である馬場による長尺

の巻頭論文（合計一六〇頁！）は、現場に赴いて痕跡を求め、その痕跡を手がかりとして事実を確定し、そうして得られた事実を積み上げることで過去を再現する歴史家の執念を読者に追体験させる異色作である。

もうひとつは本書の方法論的支柱である図像学にかかる。図像学は必ずしも審美眼のみに依存する学問領域ではない。図像学は宗教学の、民俗学には民俗学の、演劇学には宗教学の、民俗学には民俗学の、演劇学には演劇学の知的伝統の中で蓄積された方法論があるように、図像学もまた美術史学の歩みの中で生み出された独自の方法論をもつ（例えば、小池寿子「歴史図像学」高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』東京大学出版会 一〇〇五、一五五—七九頁）。昨今巷で喧しい学際研究を成功させるためには、乗り入れようとする他学問領域の方法論をまず理解し、自らの専門分野との接合点を模

新刊紹介

一〇八(四四)

索する必要があると思われるが、そうした努力がどれほどなされたのかいさか疑問が残る。確かに薩摩論文や三宅論文のように、美術史学と一般史学双方への目配りのきいた論考もあるが、全体としてはもう少し美術史家、もしくは美術史学の蓄積との対話が必要であったように思う。

とはいって、「生と死」と「図像学」という野心的かつ現代性のある題名を持つ本論集によって、一般読者を含めたわれわれは多くのものを学ぶだろう。本書が提供するテーマは、「図像学研究会」にとどまるこ

リュ九世の事績を軸に、当時のフランス社会を三章構成で描き出している。タイトルのとおり、十三世紀のフランス国王ルイ九世の事績を軸に、当時のフランス社会を三章構成で描き出している。

第一章は、ルイが即位した一二二六年の頃のフランス社会の概観である。地理的環境や人口分布などの点で地方毎の濃淡はありながらも、開墾が進み、生産が増大し多様化する農村と、まさにこの時期に興隆期にあった都市に関する説明に統いて、そこに生きた人々の社会的関係と法的身分についてまとめている。結論として、ルイ九世即位前後のフランス王国が、発展期にありつつも差異を含んだ社会であり、国王がまだその全面的な掌握にはいたっていないことが指摘される。

続く二つの章では、ルイ九世の四十四年に及ぶ治世を十二世紀半ばを境に二分して、

ジョンのブルゴーニュ大学教授（本書の解説で、ナンシー大学教授とあるのは誤り）であり、十二・十三世紀を中心とした北仏ピカルディー地方の都市ランに関する研究で知られた中世史家である。近年は、フランス北部全体会の都市に問題関心を広げて、実証的な仕事を発表し続けている。本書は、タルトのとおり、十三世紀のフランス国王ルイ九世の事績を軸に、当時のフランス社会を三章構成で描き出している。

『聖王ルイ』（新評論、二〇〇一年）が、その生涯に加えて、さまざまな同時代史料で語られたイメージと現実との比較検討といつた視角からの大部で総合的な伝記となつてゐるが、A・サン＝ドニは、それと比較すればはるかに限られた紙数のなかで、ルイの事績をフランス内外の社会の動向のなかに位置づけることに集中している。そのなから浮かび上がつてくるのは、キリスト教君主としての自覚と理想実現にたゆまず邁進する姿であり、とりわけ平和と正義の維持をもつとも重視していた点である。

とくに第三章では、十三世紀後半という、中世フランス社会の発展が停滞し、その後退が始まる折り返しの時代の様相が、ルイの事績との関連で語られるのだが、そこからはルイの高邁な理想の実現にさまざまな点で抵抗する諸勢力の姿が浮かび上がり、封建王政の限界が明らかになるのである。

著者アラン・サン＝ドニは、現在、ディ

聖王ルイの世紀

(文庫クセジユ)
1882白水社
二〇〇四・一二刊
B40 一八三頁 九五一円

アラン・サン＝ドニ著／福本直之訳